

ディズニー映画にみる人種差別・女性差別

土岐菜摘

目次

はじめに

1. 差別の歴史と変遷

- 1. 1 差別とはなにか
- 1. 2 アメリカにおける人種差別の歴史
 - 1. 2. 1 ジム・クロー法の時代(～1940年代)
 - 1. 2. 2 第二次世界大戦と公民権運動の高まり(1940～1960年)
 - 1. 2. 3 法的差別の撤廃と公民権運動の終焉(1961～1969年)
 - 1. 2. 4 現代のアメリカ黒人(1970年代～)
- 1. 3 アメリカにおける女性差別の歴史
 - 1. 3. 1 第一波フェミニズムからヴィクトリア王朝的価値観の脱却(～1945)
 - 1. 3. 2 女性像の固定化と第二派フェミニズム(1950年代～70年代)
 - 1. 3. 3 現代のアメリカ女性(1980年代～)

2. ディズニー映画と差別

- 2. 1 ディズニー映画の歴史
- 2. 2 ディズニー映画からみる人種差別
 - 2. 2. 1 第一次黄金期(1940～60年代)『ダンボ』を中心に
 - 2. 2. 2 第二次黄金期(1980～90年代)『ポカホンタス』を中心に
 - 2. 2. 3 2000年以降『プリンセスと魔法のキス』を中心に
- 2. 3 ディズニー映画からみる女性観
 - 2. 3. 1 第一次黄金期から(1937～1960年代)『白雪姫』を中心に
 - 2. 3. 2 第二次黄金期(1989～90年代)『リトル・マーメイド』を中心に
 - 2. 3. 3 2000年以降『アナと雪の女王』を中心に

3. 映画の影響と向き合い方

- 3. 1 1章と2章を通して
- 3. 2 言葉狩りと表現の規制
- 3. 3 差別的表現との向き合い方

おわりに

参考・引用文献

はじめに

人間は実際に経験した出来事だけを吸収し、学んでいるのではない。私たちは、小説や映画などフィクションの世界を通して様々な出来事を経験し、多様な知識を得ることができる。しかし、小説や映画の世界は必ずしも物事を正確に伝えてくれるとは限らない上に、私たちに偏った価値観やステレオタイプを植え付けてしまうという危険性を有している。例えば、世界中の子どもたちに今でも愛されている『ピーターパン』(1953)では、ウェンディを女性であることを理由にのけ者にするなど、当時の女性観が反映された描写がなされている。このような偏った価値観を伴った映画を見ることは、子どもたちに偏った価値観や差別観を植え付ける危険性があるように思われる。また、ディズニー長編アニメーションの歴史は80年近くにもなり、第二次世界大戦以前から現在に至るまで多くの作品を発表し続けている。そのブランド力はすさまじく、今でも作品の年代を問わず、ディズニー作品は世界中の子どもたちに視聴されている。ディズニーという名前だけで子どもにディズニー作品を見せる親も多いと考えられる。しかし、それは映画の中に適切でない描写が含まれている可能性がある以上危険ではないだろうか。私は、このような危険性について興味を持ち、ディズニー映画の中に表れる差別意識を観察していくとともに、その作品を子どもたちが見ることの危険性と差別的表現との向き合い方を考えていきたいと考えようになった。

本論文で、ディズニー映画に見られる差別的表現や価値観を読み解き、差別的表現との向き合い方を論じるにあたり、研究対象は人種差別と女性差別に限定することとする。この二つの差別が、アメリカでは、最も身近なものだと考えられ、映画にも表れやすいのではないかと考えたためである。はじめに、一章ではディズニー映画から差別的表現を読み解く足がかりとするため、人種差別と女性差別の歴史と変遷を読み解く。二章では、ディズニー映画の歴史を考察した上で、時代ごとにディズニー映画から差別的表現を読み取っていく。これは、ディズニー映画に実際どの程度当時の差別観が反映されているのかを考察するためである。続く第三章では映画に含まれる差別的表現に対してどのように向き合っていくかを、今までの差別的表現への対処方法を確認したうえで考察していく。

1. 差別の歴史と変遷

1. 1 差別とはなにか

「差別」とは何なのだろうか。差別と聞くと、男女差別や部落差別、障害者差別など様々な社会問題が頭に浮かんでくるだろう。「差別というのは、あからさまな酷いもので自分はそのようなことをするわけがないし、縁のないものだ」と多くの人は考えているのではないだろうか。しかし、差別は「まさに私たちが暮らしている現在の世の中の根底にある現象であり、社会のあらゆるところで、常に沸き起こっては消え、ということを繰り返して

いる普遍的な現象」(好井 2007)である。例えば、「オカマ」「ゲイ」をからかいの言葉として使ったとすれば、それは差別的発言と言えるだろう。また、メディアでは、偏見やステレオタイプの表現がしばしばみられる。このような「歪められたカテゴリー」を「無批判的に受容すること」こそが差別につながっていくのである。(好井 2007:61)

つまり、差別というのは、相手を認知し、理解するために必要な「カテゴリー化」(好井 2007: 144)と紙一重であり、そのカテゴリー化が歪められたもの、偏ったものになった途端、差別的と捉えられることになる。人間が分節することによってものごとを認識していることを考えると、差別は私たちが思っている以上に身近なものであるといえるだろう。

そのため、本論文では差別を「確信犯的な強烈な差別行為から、同情、哀れみに代表されるなかば無意識的な排除まで現象として多様」(好井,2007,61)なものとして捉えることとしたい。

1. 2 アメリカにおける人種差別の歴史

本節ではアメリカ人の人種差別の歴史を紐解いていく。本論文では、数あるアメリカのマイノリティにあたる人種の中で、黒人たちの歴史を扱っていく。アメリカにおける人種差別を克服するための先駆者的役割を果たしたのは、黒人であると考えためである。また、本節は主に『アメリカ黒人の歴史』(バーダマン 2011)と『アメリカ黒人解放史』(猿谷 2009)を参考にすることとする。

1. 2. 1 ジム・クロウ法の時代(~1940年代)

第二次世界大戦前後まで、黒人はジム・クロウという人種隔離政策に苦しんでいた。1862年リンカーンの奴隷解放宣言によって、黒人たちは喜びに包まれたがそれは長くは続かなかったのである。黒人たちが失意に沈むこととなったきっかけは、ホーマー・プレッシー判決と言われている。当時、アメリカ南部ではすべての者に公民権を与えるとする憲法修正第14条を無視し、公共施設や輸送機関などで人種の分離が行われていた。それに対し、1883年に最高裁は各州の権限を修正第十四条より優先するという判決をくだしたのである。これにより「分離すれど平等」の名のもとに、人種隔離は合法的に認められることとなった。

ジム・クロウというのは、南部を中心とした人種差別的な待遇全般を呼ぶが、具体的には、人種隔離や、投票権のはく奪などを挙げることができる。当時、多くの白人は黒人の同席や隣に座ることに対して嫌悪感を抱いていた。そのため、レストランや電車は白人の席、黒人の席というように分けられることになった。また、学校に関しても黒人学校、白人学校というように徹底的な分離が行われた。これらすべては「分離すれども平等」に基づいたものだったが、バスの黒人席と白人席の境目ではもちろん白人が優先され、平等とはほど遠かった。また、州や地方自治体は、投票税や識字テストなど投票権に制限をもうけた。当時、白人に比べ黒人の識字率は圧倒的に低いうえに、経済的格差も著しかったことから、黒人を選挙に参加させないための制限だったと言わざるを得ない。また、州の中には投票に善良な性格という曖昧な条件をつけることもあり、極めて主観的な基準で投票権を付与することができた。このようなジム・クロウは第二次世界大戦まで続くことにな

る。

また、雇用の面でも黒人は冷遇された。20世紀に入ると第一次世界大戦の勃発などにより、北部の工場労働者の需要が高まったことや、南部で黒人に対する執拗なリンチが頻発していたことから、約1割のアフリカ系アメリカ人が北部に移り住んでいった。しかし北部に行っても雇用が改善するということはなく、黒人が職を得ることは難しかった。ヨーロッパからやってきた労働者と黒人労働者では、ほとんどの場合でヨーロッパ労働者が採用された。特に専門性が求められる技術職に就かせてもらえることはほとんどなく、多くの黒人労働者は賃金が安く不安定な日雇い仕事に甘んじることとなった。更に、採用されたとしても、業績が悪化したとき真っ先に首を切られるのは黒人労働者であり、「雇用は最後、解雇は最初」(猿谷 2009:222)という状態であった。

しかし、20世紀初頭、黒人を取り巻く状況が悲惨なものばかりだったわけではない。ジム・クロウは思わぬ功を黒人たちにもたらした。経済力の向上と黒人独自の文化の誕生である。人種隔離の政策は、結果的に、黒人だけのコミュニティを生み出すこととなった。それにより、黒人だけの市場が生まれ、黒人ビジネスが発展していった。黒人男性の一次産業従事者は、1890年の63%から1930年には42%に減少した。また、ニューヨーク市ハーレムは、ほかの地域に移った白人の代わりに黒人が移り住んできたため、黒人の町となり、1920年代、独自の「ハーレムルネッサンス」と呼ばれる文化が生まれた。この文化は、魅力的な黒人音楽を生み、特にキャバレーの『コットンクラブ』は、すさまじい人気で、多くの白人までもがハーレムを訪れることになった。また、マッケイの詩集『ハーレムの影法師』やジェシー・フォーセットの小説『混乱』などでは、ステレオタイプから脱却した黒人像が描かれた。そして、ハーレムは黒人が自由に行動できる貴重な場所となり、「アフリカ系アメリカ人の首都」とまで呼ばれるようになったのである。

そして、20世紀初頭は、大衆運動が盛んにおこなわれた時期でもある。その皮切りは1900年、ブッカー・T・ワシントンの自伝『奴隷より身をおこして』が発表されたことだろうか。彼は、急進的な差別撤廃を求めたのではなく、黒人に教育をし、中産階級を増やすことが黒人解放の近道であると説き、そのための教育機関を設立した。その穏健な思想は、白人にとっても比較的受け入れやすいものであり、一部の白人からの支持を得ることに成功したのである。(猿谷 2009)また、1914年にはマーカス・ガーヴィーにより「米国黒人向上協会(UNIA)が設立され、「アフリカ系アメリカ人の社会的平等は妄想にすぎない。なぜなら白人がそのようなことを許すはずがないからであり、アメリカに居残る限り、決して同化することなど不可能で、永遠にマイノリティで終わることを義務付けられているのだ。」(バーダマン 2011:168)と述べ、黒人の自立と人種的な誇りを持つことを主張した。そして、1920年には「世界黒人人権宣言」を発表、これはアメリカ歴史上最大の大衆運動となった。彼らは主張の方法・内容は様々ではあるものの、黒人解放を世に訴えていったのである。

ただ、ハーレムルネッサンスや大衆運動など黒人にとって一部で明るい兆しが見えたものの、全体的にはジム・クロウ法が適用されていた、黒人にとって大変辛い時代であった。更にハーレムルネッサンスや大衆運動もまた、世界恐慌や第二次世界大戦の勃発などによって下火になっていってしまう。

1. 2. 2 第二次世界大戦と公民権運動の高まり(1940~1960年)

1940年代はアメリカ黒人の地位向上へのきっかけとなる出来事が多く起こった時代であった。黒人に対する待遇や意識の変化が見られるようになったのである。その要因として、第二次世界大戦での黒人の活躍とアメリカや世界で活躍する黒人が表れたことがあげられる。

まず、前者についてだが、世界恐慌をうけ、政府はニューディール政策を実施し、失業者の救済をはかったが、当初、黒人はほとんどその恩恵に預かることはできていなかった。現に、1940年代初頭の黒人の失業者率は22%あまりで、その数字は白人の2倍にあたる。しかし、黒人のデモを恐れたルーズベルト大統領は、公正雇用委員会を設置すること、そして、軍需産業における人種差別的な慣習を廃止することを命じた。(バーダマン 2011:180)これにより、黒人もある程度軍需産業に携わることができるようになり、その熱心な仕事ぶりがのちに評価されることとなった。また、第二次世界大戦下では、50万人の黒人の兵士が戦場へ送り込まれ、黒人部隊が活躍した。そして、黒人たちはこのような徴兵や海外派遣の経験により、彼ら自身の意識を変えることになった。ある黒人兵士の伍長は戦争から帰宅したときに、「陸軍にはいったときはニガーだったが、俺は人間になって戻ってきたんだ」(バーダマン 2011:186)と言った、という話も残っている。更に、大戦後は復員兵援護法により、大学等の教育費の援助や退役軍人に週20ドルの手当てが支払われるなど戦争に参加した黒人に教育の機会が与えられることとなった。

後者については、初の黒人メジャーリーガー、ジャッキー・ロビンソンの活躍があげられる。彼は、激しい差別を受けながらもメジャーリーガーとして大いに活躍をし、彼の背番号42は全チームで永久欠番となっている。2013年には『42—世界を変えた男—』として映画化されており、彼の残した功績の大きさを伺うことができる。また、彼以外にもラルフ・バンチが黒人として初めてノーベル平和賞を受賞するなど、著名で尊敬できる黒人が台頭しはじめていたのである。そして、このような要因が50年代の公民権運動へとつながっていく。

50年代から60年代はアメリカ黒人にとって公民権運動の時代といえるだろう。そもそもの公民権運動のはじまりは、1954年のブラウン判決と1955年のエメット・ティル殺人事件にあるといわれている。ブラウン判決というのは、黒人であることが理由で娘が学校に通えないのは修正14条に違反している、とする訴訟に対する判決のことである。ブラウン判決は、「人種のみに基づく分離が子供たちから平等な教育機会を奪っているとし、判決文では「公教育の現場においては『分離すれども平等』は認められない」と断言した。」(バーダマン 2011:189)のである。しかもこれは判事全員が一致した意見であった。70年以上続いてきたジム・クロウが初めて否定されたのである。

ブラウン判決が黒人にとって良い知らせであったのに対し、エメット・ティル殺人事件は、黒人はもちろんのこと白人にとっても悪い意味で衝撃を与えた。エメット・ティル事件とは、白人女性を口説いたことで14歳の少年エメット・ティルが顔の判別が不可能なほどにリンチをうけ、殺された事件のことである。それだけでも、もちろん衝撃的なのだが、エメットの母親は少年の遺体を4日間人の目にさらし、事件の残虐性をアピールした。そして、その写真は雑誌にも掲載され、多くの人にショックを与える結果となったのである。しかも、白人女性の夫が誘拐容疑でとらえられたものの無罪となったこともあり、ア

アメリカ黒人たちは怒りに震え、公民権運動は高まりを見せていくことになる。

1956年、公民権運動の大きな成果が見られた。公共交通機関で座席を分離する州法や市の法律は違憲であるという判決が出されたのである。この判決の陰には、若き日のマーティン・ルーサー・キング・ジュニア(以下キング牧師)らによる1年にもおよぶモンゴメリーのバスボイコットがあった。参加者はモンゴメリー周辺に住む黒人の90%以上にもおよび、その数と徹底的な非暴力を貫く姿勢がこの判決を勝ち取ったのである。また、この判決によって公民権運動はさらなる高まりを見せ、全国へと広がっていった。もちろん反発がなかったわけではない。一部の白人は黒人と白人が共に学ぶ公立学校ではなく、私立の白人学校にいかせるようになり、アーカンソー州ではすべての公立学校を閉鎖するという手段で公民権運動に抵抗したが、その高まりを止めることはできなかった。

1. 2. 3 法的差別の撤廃と公民権運動の終焉(1961～1968年)

1960年代になると、とうとう黒人差別が公民権法と投票権法によって撤廃されることになる。公民権法は、ホテルなどを含むすべての公共施設での人種分離を禁止する法律であり、ジョン・F・ケネディ大統領が1963年に提出した。この法案可決を求め、キング牧師は8月28日、ワシントン大行進をおこなった。参加者は25万を超え、アメリカ史上人権を求める最大のデモとなり、白人の俳優やスポーツ選手など様々な人が集まった。ここで人種の融合を訴えた名演説「I have a dream」が生まれたのである。そして、このデモ行進は、流血や暴力を伴わず、徹底的に非暴力であったことが、国民に感銘を、黒人には誇りを与えた。(猿谷 2009)結果、この法案は翌年可決されることになるのだが、その前年1963年11月22日ケネディ大統領がテキサス州ダラスで暗殺され、アメリカ黒人の多くが絶望を味わうことになった。

公民権法成立後の1965年、南部出身のリンドン・ジョンソン大統領が投票権法案を提出し、テレビでの生中継が行われた。そこでジョンソンは、「これは、アメリカの黒人たちがアメリカの生活の恵みを十分に確保せんとする取り組みである。彼らの大義はアメリカの大義でもある。なぜなら、偏見と不公平という有害な遺産を克服せねばならないのは、黒人たちだけでなく、われわれすべてでもあるのだから。そしてわれわれは勝利するだろう。」(バーダマン 2011:211)と演説した。そして、8月、識字テストや憲法解釈試験、人頭税などを禁止とした投票権法が制定され、更に、南部の大部分の州に投票を監督する連邦検査官を派遣した。投票権自体は100年前から保障されていたが、やっと本質的な意味での黒人投票権が認められ、公民権法と投票権法二つの法案の成立をもって法的な黒人差別は撤廃されたのである。

しかし、法的平等を達成したことにより公民権運動は徐々に衰退していく。その要因として、白人たちの意識の変化が挙げられる。そのきっかけとなったのは、1965年の「ワッツ暴動」である。警官が蛇行運転をしていた若い黒人男性を尋問したのがきっかけで暴動に発展、ビルの焼き討ちや略奪が10日間続き、35人が死亡、4000人が逮捕されるという大惨事となった。公民権運動での黒人の徹底的な非暴力というイメージは薄れ、白人にとって黒人は、「罪のない犠牲者」から「恩知らずの略奪者」となっていく。(バーダマン 2011)また、「多くの白人は人種統合が「あまりに早く進みすぎた」と感じていた。また、アフリカ系アメリカ人たちはすでに同等の待遇を勝ち取っており、今は「あまりに多くを

求めすぎている」と主張」(バーダマン 2011: 220)するようになっていったのである。

そして、1969年4月4日のキング牧師暗殺、その二か月後の大統領候補ロバート・ケネディ暗殺によって、公民権運動は終焉を迎えることになる。

1. 2. 4 現代のアメリカ黒人(1970年～)

1970年代、黒人たちは差別をまだ感じていたのに対し、多くの白人は60年代後半から引き続き「黒人は多くを求めすぎている」という思想をもっており、「あからさまな人種差別はなくなったのだからこれ以上は必要ない」と考えていた。それに変化の兆しが表れたのは、アレックス・ヘイリーの小説『ルーツ』を原作とした視聴者1億3000万人にも及んだテレビドラマであるとバーダマンは言う。『ルーツ』は、アフリカ人が奴隷として働かされその子孫も奴隷になっていく様子をリアルに描くことで、白人が黒人の歴史を知ることの必要性を認識する良いきっかけとなった。(バーダマン 2011:4)そして、公民権法成立後行われてきたアフーマティブアクションなどもあり、黒人の雇用状況は少しずつ改善していった。

しかし、1980年代から90年代にかけて、レーガニズムと呼ばれる黒人にとっては不遇の時代が少なくとも政策面では到来する。「カラーブラインド」という一見平等な政策により、黒人の貧困は拡大した。また、あからさまな差別がないのだから、アフーマティブアクションなどの黒人優遇政策はもう必要ないという気運が高まっていった。一方で黒人の政界進出が各地で見られるようになったのもこの時期である。1983年には、シカゴでハロルド・ワシントンが初の黒人市長に当選し、翌84年には、候補になることはできなかったものの、黒人でキング牧師の弟子であったジェシー・ジャクソンが初めて大統領選挙の予備選に出馬した。しかし、83年4月のギャラップ調査によると、「支持政党が黒人を大統領候補に選んだら」という質問に対して、「投票しない」が依然16%を占めていた。これは女性より高い数値であり、女性の場合より人種の抵抗が強いことが示されている。

また、黒人に対するネガティブなイメージは未だ根強いものがあつた。元フットボールの選手で俳優のO. J シンプソンが、元妻と友人を殺したという裁判で無罪判決をうけた。これに対し、世論調査で、白人の回答者の四分の三は有罪、黒人の四分の三は無罪と考えていたことがわかった。白人の黒人は暴力的な存在というイメージはぬぐえていなかったのである。

2000年にはいると、黒人だけでなく、ヒスパニック系やアジア系など人種の多様化はさらにすすんでいった。20世紀前半のWASP中心の「人種の垣塙」から決して溶け合うことなく互いが主張しあう、人種の「サラダボウル」へと変貌を遂げていったのである。2004年にバラク・オバマは「黒人のアメリカ、白人のアメリカ、ラティーノのアメリカ、アジア系のアメリカなどは存在しない。あるのはアメリカ合衆国だ。」(ワイズ 2011:258)と演説し、「人種の超越」(ワイズ 2011)を訴えた。そしてその4年後、オバマはアメリカ初の黒人大統領に就任した。オバマへの白人票は全白人票の半分以下であったが、過去40年で民主党大統領候補が獲得した白人票のなかでは一番多かった。(ワイズ 2011:6)このように、差別は少しずつ改善しつつあるのだろう。

しかし、白人と黒人が完全に平等になったわけではない。2000年の黒人家庭の平均所得は30400ドルであるのに対し白人家庭は44200ドルといまだ大きな隔たりがある。また、

2009年の調査で大卒黒人男性の失業者数は白人男性の二倍であるという結果もある。このことから、経済的格差はもちろんのこと、人種による偏ったイメージはいまだに改善されていない部分も多いと考えられる。

1. 3 アメリカにおける女性差別の歴史

本節では主に『アメリカジェンダー史研究入門』(有賀ら編 2010)と『アメリカに女性大統領は誕生するか』(蓮見 2015)を参考とし、女性差別の歴史を明らかにする。

1. 3. 1 第一波フェミニズムからヴィクトリア王朝的価値観の脱却(~1945年)

アメリカで女性参政権などの政治的平等を求める第一波フェミニズムが興隆したのは、19世紀後半からであった。19世紀頃、アメリカにはイギリスのヴィクトリア王朝的な価値観が浸透してきており、それが当時の女性観にも大きな影響を与えていた。すなわち、女性は「内」、家庭にいるべきものであり、政治など「外」の事象に関わるべきではない、というものである。この価値観に対抗した最初の大きな出来事は、1848年にエリザベス・ケイディ・スタントンがニューヨーク市のウオータールーでおこなった集会だろう。この集会には200人以上の女性と約40人の男性が集まり、そこでスタントンは、政治的活動に女性も参加できるように要求し、従来の女性に求められる家庭性、男女の領域を分離することに異議をとらえた。(エヴァンズ 1997)

また、忘れてはいけないのがこのようなフェミニズム運動発生の背景として、黒人運動があるということだ。奴隷解放運動を通して、黒人と女性は差別を受けているという点で類似していると考えられる女性たちが増え始めたのである。また、社会的弱者が人権を訴えていく方法を女性は奴隷解放運動を見て初めて学ぶことができたというのも重要であった。そして、19世紀後半にかけて女性運動は高まりを見せていく。

1860年代以降様々な女性運動や組織が作られ、女性参政権を訴えていくことになるのだが、その主張の方法は様々で、ときに対立を伴うものであった。1869年には二つの婦人参政権を求める組織が誕生した。エリザベス・ケイディ・スタントンらが設立した全国婦人参政権連盟(NWSA)とルーシー・ストーンらが設立したアメリカ婦人参政権協会(AWSA)である。NWSAは、黒人に参政権を与える憲法修正第十五条に女性の参政権を与えるという文をつけることを求め、AWSAは、修正第十五条の前に州の女性参政権を獲得すべきという立場に立ち、活動を展開した。結局、修正第十五条によって女性参政権が認められることもなく、1節で述べたようにジム・クロー法によって修正第十五条は事実上無力化され、女性運動は大きく阻害されることになった。1890年にはNWSAとAWSAは統合され、全国アメリカ女性参政権協会(NAWSA)となり、国際的組織へと発展した。

そして、NAWSAと1916年にアリス・ポールが設立した全国婦人党(NWP)が中心となって運動は展開していく。NWPは憲法修正条項の成立のみを目標にかかげ、ウィルソン大統領を攻撃した。それに対し、NAWSAはより広い意味での男女同権を目標に掲げ、ウィルソン大統領と良好な関係を作ることによって政権とのつながりを強いものにしようと考えた。(有賀 2010)このように、アプローチの仕方は正反対と言ってもよかったが、結果、1920年女性参政権を認める憲法第十九条修正案が発行された。黒人の参政権が実質認めら

れたのが 1965 年であることを考えると、それに比べれば、女性参政権の獲得は比較的早いものだったといえるだろう。しかし、その後女性運動は勢いを失い、第二次大戦後に一時的に高まりをみせるものの、それも衰えてしまう。

1920 年代は女性参政権が認められ、ヴィクトリア王朝的な価値観からの脱却が見られる時代であった。濃いメイクでセクシーな服を着てジャズやダンスを楽しむ女性たちが現れ、賃金労働を始める女性も増えた。女性が「内」から「外」へ進出してきたのである。とはいうものの、女性が経済的自立をするのはまだ難しく、賃金は男性に比べ低いものであったばかりか、黒人女性は家政労働以外に従事するのすら厳しいのが実情であった。

1930 年代になると、更に既婚白人女性の労働者は増え、多くの白人女性が事務員やタイピストなどのいわゆるホワイトカラー職に従事するようになった。彼女たちは女性に関する法改正や女子教育が充実し始めた頃に生まれた世代であり、女性運動を常に身近に感じながら子供時代を過ごし、女性参政権が認められたときにちょうど成人を迎えた世代であった。(大辻 2010)そのため、ヴィクトリア的価値観に縛られない女性観を持つことがある程度可能であった。

法的な面ではある程度の改善が見えた女性差別であるが、雇用差別などの問題はいまだに根強く残っていた。まず、1930 年代後半に行われていた世論調査によると、扶養義務を果たしている夫の妻が働くことに約 80% 反対していた。つまり、夫に十分な稼ぎがあり、妻が働く必要がないのであれば働かないのが理想、というわけである。いまだに、夫が稼ぎ、妻は家の仕事をし、母としての役割を果たすという価値観が残っていたといえるだろう。その上、最高裁や政府もその価値観を前提とした判決や政策を実施した。まず、恐慌下では夫婦で公職に就くことが禁止され、多くの妻が職を失った。失業率 25% という、時代では一家に一人働き手を持つのがやっとなり、妻が職を奪っているという認識が存在した。(大辻 2010) また、1908 年のミューラ対オレゴン判決では、女性の最大労働時間について次のような判決が下された。「女性は、男性と異なり身体的に弱く、長時間労働は男性以上に女性に影響し、しかもそれは長期にわたる。将来母となり家庭役割をになう女性の健康は、公共の福祉に深くかかわる」(大辻 2010:223) という女性の家庭的役割を前提とした判決である。雇用に関して付け加えると、第二次世界大戦により軍需産業において女性は一定の活躍を見せたものの、手先の器用さや忍耐強さなど「女性の特性」を生かした職種に従事することが多かったと、ルース・ミルクマンは述べており、女性に対する偏ったイメージが先行していたことが分かる。(佐藤 2010)

1. 3. 2 女性像の固定化と第二派フェミニズム(1950 年代～70 年代)

「アメリカ史における 1950 年代は、しばしば「コンセンサス(合意)」の時代と呼ばれる(土屋 2010:273)つまり、すべての事象にこうあるべき、という規範があり、それに即した価値観に基づいて生活することが求められていた時代であった。その中で女性は、冷戦下であることもあり、保守的でつましやかな女性像を政府やメディアは求めた。第二次大戦が終了し、女性が家庭に帰るといった流れができたことや、安定した生活への憧れが芽生えたこともそれを後押しした。妻たちは与えられた性役割を忠実に守るようになっていったのである。メディアの中には夫に寄り添う妻や子育てをする母親などが頻繁に登場し、まさに「1950 年代は、規範としての家庭性がアメリカ人女性に強く求められ、メディアを

通して広く流布された時代であった。女性は妻・母として家庭にいるのが最も幸せであるという、ジェンダーに関する「コンセンサス」が広く存在していた」(土屋 2010:273)のである。また、米国広報・文化交流庁(USIA)は、冷戦下でアメリカの魅力を発信するため、海外にアメリカ女性の生活を発信していった。そこで家事を行い、真面目に子育てをし、日曜日には教会へ行くという働き者で女性的なアメリカ人女性像を作り上げていったのである。しかし、実際にこのような生活ができたのは、白人中産階級以上の女性たちだけであり、介護職などのピンクカラー職種の既婚女性の就業率は増加し、女性の労働組合の加入率も増加していった。このような、「理想のアメリカ人女性」以外の女性たちが第二派フェミニズムの担い手となっていくことになるのである。

1960年代にはいると女性の全国組織「全米女性機構」(NOW)など多くの女性機構が結成され、経済的な平等などを求める第二派フェミニズムが台頭してくる。特に NOW は、1966年にベティ・フリーダンを中心に結成されて以降、会員数を増やし、その数は最大25万人とも言われ、反戦運動、男女平等憲法修正案、性的マイノリティの権利擁護運動など様々な幅の広い活動を行っていった。60年代の女性団体は政治的・経済的な平等を追究することを主な活動としていたが、ジェンダー観の根本的な変革を求める団体も多数存在しており、活動は多岐にわたっていた。このような活動は功を奏し、1964年、公民権法は、人種差別とともに男女差別を禁止するようになった。第二派フェミニズムが活発になるにつれ、女性の生き方も多様化していった。1970年には第二次世界大戦以前は15%だった既婚女性の就職率は50%にも及び、「理想のアメリカ人女性像」だけではない新しい家族や女性のありかたが広く受け入れられるようになっていった。

70年代になると雇用の面でさらなる改善がみられるようになっていった。まず、70年代から80年代にかけてアフーマティブアクションを指示する法律が成立した。これに対し、逆差別ではないかという批判があったものの、1978年のバッキー判決で最高裁が「人種などによる人数の割り当ては許されないが、人種などを考慮に入れることは認められる」(蓮見 2015)とし、この批判をはねのけた。このような政策によって、80年代までに雇用の在り方は目に見えて改善していった。また、1974年には女性問題に進歩的な州とされているコネティカット州のエラ・グラッソが初めての女性州知事に就任し、黒人よりも一足早く本格的に政治進出が進むこととなった。

1. 3. 3 現代のアメリカ女性(1980年代～)

公民権運動やアフーマティブアクションによって女性の雇用が促進され、1980年代は、より一層女性の社会進出が進んだ時期であった。マドンナの圧倒的な歌声を持つ歌手としての側面と、実業家としての側面は若い女性の憧れであった。また、1981年には連邦最高裁判所の判事にサンドラ・デイ・オコーナーが女性として初めて就任し、1984年にはジェラルディン・フェラーロが女性初の民主党の副大統領候補となった。法整備もさらに進められ、妊婦に休暇を与える州法や産休制度も充実していき、93年には推定4200万人の労働者に産後休暇をとるよう義務付けた。それにより既婚女性の就業率は60%とさらに上昇することとなった。しかし、保守派からの女性観の変化は危険であり、社会の崩壊をもたらすという批判により、第二派フェミニズムは終焉を迎えることとなる。男女の平等権を保障する憲法修正案は不成立となり、アフーマティブアクションは既に必要なくなった

ものとして廃止に向かっていった。

そして時代は、ポストフェミニズムの時代と移っていく。ポストフェミニズムというのは、女性差別の撤廃は十分になされたためこれ以上は必要ないとする考え方である。また、多文化主義的な観点からも第二派フェミニズムは否定された。彼らは、70年代以降女性の社会進出は進んだものの貧しいシングルマザーも増加するという現象がおこっており、これは前者が白人女性、後者が黒人やラティーノ中心であると主張した。(有賀 2011:307)第二派フェミニズムは白人女性に焦点をあて、ほかの人種などの視点が欠如していると批判したのである。

その一方で90年代にはいると、第二派フェミニズムは不十分なものであったとして第三派フェミニズムが登場する。初めてこの言葉が使われたのは1992年当時大学生だったレベッカ・ウォーカーが『ミズ』という雑誌で「第三派になる」という表現を用いたときだと言われている。しかし、第三派フェミニズムは実に多様なもので定義をするのは大変困難である。その中で共通しているのは「多様性と選択の自由」(有賀 2011)ということである。第二派フェミニズムもその批判もすべて肯定し、その中から自分にあったものを自由に選択し、多様な価値観を認めること、そして多元文化的な視点に立っていることが第三派フェミニズムの特徴としてあげられる。

2000年以降になるとアメリカでは女性差別を問題として扱うことは少なくなっていく。90年代には女性の議員が大幅に増え、2008年にはヒラリー・クリントンが民主党大統領候補指名でオバマに惜しくも敗れた。これは女性大統領が実現可能であることを示したように思われた。しかし、2007年の『ニューヨーク・タイムズ』紙に興味深い世論調査が発表された。これによると「黒人候補には投票しない」が4%であったのに対し、「女性候補には投票しない」は11%だったそうだ。87年のギャラップ調査では、「支持政党の大統領候補が女性でも十分な資格があればその候補に投票する」が1937年の34%から87年には82%に増えており、女性の政界進出も黒人より進んでいたといえるが、2000年にはいって、逆転したかのような結果が出たのである。また、経済格差もまだ完全には改善できておらず、女性差別は解決したかにみえる現在であっても、まだすぐには分からないところで差別や格差は存続していると考えることができる。

2. ディズニー映画と差別

2. 1 ディズニー映画の歴史

まず、ディズニー映画から差別や偏見を検証していくにあたり、ディズニー映画の歴史を簡単に確認していきたい。なぜなら、ディズニー映画というのは、世界的に高い評価を得る一方でその大衆性と発信力ゆえにときには差別などの批判にさらされてきたためである。今回はディズニー映画の中でもディズニー・ピクサー作品や短編作品は除外し、ウォルトディズニーアニメーションスタジオの長編アニメーション作品に『南部の唄』(1946)を加えた55作品の中から考察していくこととする。その理由は1937年公開の『白雪姫』

から 2014 年公開『ベイマックス』と年代の幅が広いこと、作品がコンスタントに発表されていることや知名度が突出していることである。『南部の唄』を対象に加えたのは、差別を研究するという観点から触れる必要のある作品と判断したためである。

ディズニー映画の歴史は大きく分けて、『白雪姫』(1937)から『ジャングル・ブック』(1967)の第一次黄金期、『おしゃれキャット』(1970)から『オリバー・ニューヨーク子猫ものがたり』(1988)までの第一次低迷期、『リトル・マーメイド』(1989)から『ターザン』(1999)までの第二次黄金期、『ファンタジア 2000』(2000)から『ルイスと未来泥棒』(2007)までの第二次低迷期、そして、『ボルト』(2008)から現在までの 5 つの時代がある。(叶 2014)

まず、第一次黄金期といっても、期間は 30 年におよびその間すべての作品が評価されたわけではない。150 万ドルという当時では莫大な費用をかけ制作された世界初の長編アニメーション映画『白雪姫』は、1939 年までに 10 か国語 49 か国で公開され、最終的に 6000 万ドル以上の大ヒットとなった。芸術面でも大いに評価され、1938 年のアカデミー賞で名誉賞を受賞し、大きなオスカーの像ひとつと 7 人の小人になぞらえて、小さな 7 つの像が送られ、アニメーションは芸術とまでいわしめることになった。しかし、その後の作品は振るわず、『ファンタジア』(1940)の大失敗もあり、財政は逼迫していった。ただ、このころの『白雪姫』や『ダンボ』(1941)などの作品にはいまだれば差別的と捉えられるような描写が含まれているのだが、目立った批判にはあっていないようであった。そしてこれらの作品は 50 年代に入ると再評価され、再上映により大きな利益を上げていった。(有馬 2004)

ディズニーが初めて差別の問題とぶつかったのは、『南部の唄』(1946)だと考えられる。『南部の唄』は、白人の少年ジョニーが黒人のリーマスおじさんから、ウサギどんの話を聞き、心が癒されていく様子を描いた物語で、お話の部分のみアニメーションを使った実写とアニメの融合作品である。この話は舞台が南部のプランテーションであったことが批判のきっかけとなった。全米黒人向上協会(NAACP)が「プロダクションは奴隷制を美化した危険なアニメを永続化させるのを手助けしている」(灘本 1999)として抗議、ボイコット推進運動が行われたのである。NAACP は主に、黒人であるリーマスおじさんが裕福な白人家庭と対等に話しているシーンを、奴隷制があった南部ではありえない現象で、奴隷制を肯定していると批判した。一章一節で触れたようにこのころアメリカでは、黒人差別に関する問題意識が芽生え始めていた時期であった。ウォルト・ディズニー(以下ウォルト)は中西部とカリフォルニアという人種差別に関して敏感な地域に住んでいなかったことや、戦前はディズニーに限らず、短編アニメでは人種的特徴を誇張して笑いをとるという手法が多く存在していたことにより、問題を深刻にとらえることができなかった。アニメで許される誇張が実写では許されないとは思ってもみなかったのかもしれない。現にウォルトは、映画製作者から黒人指導者をつけるよう提言をうけたもののそれを受け入れなかった。(ゲイブラー 2007)このこともあり、ウォルトはのちに人種差別主義者であるというレッテルを貼られることになってしまう。また、『南部の唄』のアトランタの試写会ではジム・クロウ法により泊めてくれるホテルがなかった主演ジェームズ・バスケットが参加することができなかった。これらの批判をうけ、アメリカではホームビデオが発売されることはなかった。日本でも一時ホームビデオが発売されたものの DVD 化はされておらず、ビデオも現在では絶版になっている。(灘本 1999)しかし、このような批判にも関わらず、本作は

アカデミー賞音楽賞を受賞し、ディズニーランドではスプラッシュマウンテンの舞台となっており、高い人気があることは付け加えておきたい。

この後も『ピーターパン』(1953)では先住民に関する批判や性差別の批判、公民権運動さなかに公開された『ジャングル・ブック』(1969)では人種差別的な批判にさらされていくことになるが、いずれも世間的には高い評価を得た。

1969年のウォルトの死後、長編アニメーション部門は徐々に衰退し、第一次低迷期を迎えることになる。この要因としてはウォルトを支えていたアニメの主要な制作陣が世を去ったことや、ハリウッド全体が不振だったために、ディズニー社の軸がディズニーパークに移っていったことが考えられる。(有馬 2004)

第二次黄金期の始まりは、経営体制が一新され会長にマイケル・アイズナーが就任し、映画部門の統括にジェフリー・カツェンバークを据えたいわゆるアイズナー体制に移行したことである。そしてアイズナー体制下の最初の作品が『リトル・マーメイド』(1989)である。ディズニー社はブロードウェイ進出を狙い、ミュージカル色の強い作品を復活させた。その戦略がはまり、ディズニーの長編アニメは1989年から1995年の間に5度もアカデミー歌曲賞を受賞することになる。そして、『リトル・マーメイド』はその後のアニメーションの興行収入の記録を塗り替える『美女と野獣』(1991)と『アラジン』(1992)と並んで最高の評価をうけることになった。そして、『リトル・マーメイド』以降の作品で特徴的なのは明らかにフェミニズムを意識した作品が作られていることである。これは、当時、映画の総収入の90%が映画館で上映された後のホームビデオやグッズなどで占められており、企業イメージを損ねないことが昔以上に重要になっていたことと無関係ではない。(有馬 2001)しかし、『リトル・マーメイド』は多くの人権団体により、家族を捨て、王子と幸せになるラストは女性の生き方を狭めているとの批判を受けることとなった。その後ディズニーは女性の役割をより慎重に考えると約束したものの、次作『美女と野獣』では暴力的な男を献身的に支える女性像であるとの批判が寄せられた。(荻上 2014)このように第二次黄金期ではかつてないほどの興行的な成功をおさめたものの、差別的であるという批判に絶えずさらされてきたことが分かる。

2000年代に入り、第二次低迷期に突入した長編アニメ部門だが、2009年の『プリンセスのキス』あたりから復活の兆しを見せ始め、『塔の上のラプンツェル』(2010)、そして『アナと雪の女王』(2013)と立て続けに大ヒットを飛ばしている。(叶 2014)これらの作品の特徴は第二次黄金期の批判を受けて、プリンセスものでありながら恋愛色を薄め、家族愛など別のテーマを盛り込んでいることだといえるだろう。

2. 2 ディズニー映画に見る人種差別

本節からは、ディズニー映画を実際に視聴し、時代ごとにそれぞれの人種・民族がどのように描かれてきたのか、当時の状況がどの程度作品に表れているのかを見ていきたい。人種差別の観点から作品を考察していくにあたり、第一次黄金期の作品から『ダンボ』(1941)、第二次黄金期の作品から『ポカホンタス』(1995)、そして現在の作品から『プリンセスと魔法のキス』(2009)という三作品を中心に扱う。また、必要に応じてほかの作品も取り上げ、包括的にディズニー映画の中での人種についての描かれ方を探っていく

こととする。

2. 2. 1 第一次黄金期(1940~60年代)『ダンボ』を中心に

『ダンボ』(原題 Dumbo)は1941年にディズニーの長編アニメーション4作目として公開された作品である。ジャンボ・ジュニアと名付けられたサーカスの小象がその大きい耳のために、ダンボ(英語でまぬけ、という意味)とよばれ虐められるが、ネズミのティモシーの助けを借りてその大きな耳を翼にして空を飛べるようになることで周りから認められ、人気者になる、というストーリーである。この作品が公開された当時は、一章二節一項で述べたようにジム・クロウ法に支配されていた時代であった。黒人と白人はあらゆる場面で分離され、黒人は激しい差別をうけていた。このような現状がどのように、『ダンボ』に表れているのだろうか。

まず、この作品に登場する5羽のカラスについてである。彼らは、服を身に着け、よくしゃべり、ダンボの相棒ティモシーに匹敵するほど人間的に描かれており、黒人を連想させる。本編で名前が明かされることはないが、このカラスの中でリーダー的役割のカラスの名前はジム・クロウという。最近ではダンディ・クロウと呼ばれることが多いそうだが、ジム・クロウとはなんとも皮肉のこもった名前である。そのことからこのカラスたちが黒人をイメージしたものだということが分かる。このカラスたちは作品の中で最初はダンボに対し、からかうような態度をとるが、ティモシーからダンボの生い立ちを聞くと、同情して空を飛ぶための特訓に協力することになる比較的好意的に描かれたキャラクターである。大きな耳をして化け物扱いしたダンボの周りには、嫌われもののティモシーや黒人を模したカラスなど弱者が集まっていくという構図になっていると考えられる。

また、私がこの映画の中で当時の価値観が鮮明に表れたと感じたのが黒人の描かれ方である。『ダンボ』の中には、サーカスのテントを雨の中一晩中張り続ける肉体労働者と動物のシーンがある。そこで労働者たちが歌う「労働者のうた(Roustabouts)」の歌詞は以下のとおりである。

We work all day, we work all night

We never learned to read or write

We're happy-hearted roustabouts.

…We don't know when we get our pay and when we do , we throw our pay away

(映画『ダンボ』より)

一日中働き、一晩中働く

読み書きは教わったことがない

おれたち明るい働き者

賃金がいつ出るかはわからないが、出たらパーッと使う

(著者訳)

このように、労働者は教育受けられず、賃金も不安定さらに長時間働いていることがこの歌詞からうかがえる。そして彼らは全員が黒人であった。つまり、このような過酷な労働に就くのは黒人というイメージが当時の人々の中に存在していたと考えられる。更に、こ

のシーンは暗い画面の上に豪雨という天候、音楽の暗い曲調から子どもたちには恐怖感を与えるシーンである。このような描写は、子どもたちに黒人に対する恐怖心を植え付ける可能性がある。

そして、この映画の中では、サーカスを見に来る観客や身なりの良いものはすべて白人として描かれている傾向にあり、それは同時代のほかの作品でもみることができる。40年代から70年代ごろまでの作品は圧倒的に白人の登場人物が多い。『白雪姫』などのいわゆるプリンセスものは白人女性と白人男性が主役である。白人以外のメインの登場人物というと、『ピーターパン』(1953)の先住民の娘タイガー・リリーと『ピノキオ』(1940)に登場する悪役ストロンボリがラテン系のように見えることくらいである。長編アニメーションで白人以外の人物が主人公になるのは『ジャングル・ブック』(1969)の主人公モーグリまで待たなくてはならないだろう。ただ、この作品は、動物たちは英国式に発音するにも関わらず、モーグリの発音になまりが入っている、として激しく抗議を受けているので、課題が残る作品と言える。このように、第一次黄金期の作品は、当時の黒人に対する偏見や差別観がよく表れているといえる。また、公民権運動が活発に行われた60年代にも白人中心の作品が作られていたことは、ディズニーが保守的な作品づくりをおこなっていたといえるかもしれない。

2. 2. 2 第二次黄金期(1980~90年代)『ポカホンタス』を中心に

第二次黄金期の人種差別の状況は一章二節四項のとおり、表面上の差別がなくなり、差別問題は解決した、という気運が高まりを見せはじめた黒人にとって逆風の時代であると同時に、それに逆らい政界など様々な場面で黒人の活躍が目立ち始めた時期であった。また、多くの少数民族が共存しながら主張しあう「人種のサラダボウル」と呼ばれる時代になりつつあった。そして、ディズニーは、公民権運動時にはほとんど描くことのなかった白人以外の世界の作品を公民権運動終了後、20年近くたって立て続けに発表することになる。その始まりが、中東を舞台とした『アラジン』(1992)である。初めて白人以外をプリンセスに据えた『アラジン』に対して人種に関する描写への批判が寄せられなかったわけではないようだが、結果的には興行収入3億5000万ドルというアニメの歴史を塗り替える大ヒットを記録しアカデミー歌曲賞も獲得した。(有馬 2001)それに勢いをもらったかのように、ネイティブ・アメリカンを主人公とした『ポカホンタス』、ジプシーをヒロインに据えた『ノートルダムの鐘』(1996)、中国を舞台とした『ムーラン』(1998)と様々な人種を描いた作品を世に放っていくのである。

これらの作品の中で最も多くの批判が寄せられたのが『ポカホンタス』であった。『ポカホンタス』はディズニーが初めてネイティブ・アメリカンを主人公として描いた作品であると同時に、初めて歴史上実在した人物を扱った作品である。ポウハタン族の酋長の娘ポカホンタスの伝説や逸話をもとに作られたストーリーであり、インディアン団体に制作の協力を要請し、正確にインディアンを描こうとした挑戦作であった。しかし、ポカホンタスとジョン・スミスの恋愛話など歴史的な事実と大きく異なる改変が行われていること、主人公ポカホンタスの服の露出度が高いこと、入植者であるイギリス人が最終的に受け入れられていること、「野蛮人」「未開人」などの差別用語が多く使われていること、「サベジズ」という歌があることなど公開当初から様々な批判を浴びた。(Brunetteら 2011)ただ、

実際に作品の内容に目を向けてみると描かれているのは、異文化を受容することの大切さと真摯に向き合えば障壁を超え共存することができるという、時世に合った多元文化的視点にたったメッセージである。もちろん批判の通りの描写も見られるが、私は賞賛すべき面も『ポカホンタス』には存在していると考え。

まず、ポカホンタスの服などの事実と異なったポウハタン族の文化を描いたことはディズニーの認識不足だと言わざるを得ないだろう。また、『ヘラクレス』(1997)のようなギリシャ神話をもとにした作品の大幅な改変と違い『ポカホンタス』は実在の人物である以上歴史的な考証については、配慮が必要だと考える。史実に基づくと前置きしている以上は、ある程度正確に描く必要があるし、大幅な改変を行うのであれば名前を変えるなど別の措置が必要だったのではないだろうか。

しかし、『ポカホンタス』には評価すべき点や昔の作品に比べ変わった点がある。『ピーターパン』には、インディアンのタイガー・リリーやその父が登場するが特にタイガー・リリーの父は怒りっぽく野蛮というインディアンのステレオタイプのイメージで描かれており、最終的には主人公の味方になるものの恐ろしい印象がぬぐえないものだった。しかし、『ポカホンタス』では、白人が侵略をおこなう悪者として、先住民は攻撃されて初めて立ち上がる者として描かれている。視聴者が共感するのはポカホンタスであり、先住民側である。また、白人側が先住民と出会う前から頻繁に「野蛮人(savages)」と先住民を呼ぶのに対し、先住民側は「来訪者(visitor)」と呼んでいたのだが、攻撃されたことにより、「白い悪魔(white demon)」などと呼称を変えているなど、呼び方にも注意を払っているように見受けられる。

また、ジョン・スミスがポカホンタスに対し、「土地の上手な使い方を教えるよ。君は何も知らない。教えたいんだ。<未開人>の生活を豊かに…」という啓蒙主義的な発言を行うシーンがある。それに対しポカホンタスは「Colors Of The Wind」を歌い、異なった素晴らしい文化の存在や文化や人種を超えて分かり合えることを伝えるのである。ポカホンタスのこの分かり合えるという姿勢がこの作品では正しいものとして描かれている。そのことを考えると劇中歌「Savages」に対する批判は的を射ていないように感じる。「Savages」の問題の歌詞は以下の通りである。

What can you expect from filthy little heathens?
Their whole disgusting race is like a curse
Their skin's a hellish red
They're only good when dead
They're vermin, as I said And worse
They're savages! Savages! Barely even human
Savages! Savages! Drive them from our shore!
They're not like you and me, which means they must be evil

(映画『ポカホンタス』より)

汚く小さな異教徒から何が期待できるのか
やつらの不快な人種は皆まるで呪いのよう
やつらの肌は地獄のような赤

やつらは死んで初めて良いといえる
やつらは害虫、やつらの言った通り、さらに悪い
やつらは野蛮人！野蛮人！人間かどうかとも怪しい
野蛮人！野蛮人！我らの岸からやつらを追い出せ
やつらは君と私とは違う、つまり奴らは悪だ

(著者訳)

これは、侵略し金を手に入れるため、悪役のラトクリフ総督ら白人側が歌う場面である。確かに先住民を侮辱するような言葉が並んでいるが、白人側を悪と描いていることや実際の先住民の迫害を考えるとこのくらいのことは、言ってもおかしくないように思える。それに対して仲間を殺され戦いを決意した先住民側はこのように歌っている。

This is what we feared. The paleface is a demon
The only thing they feel at all is greed
Beneath that milky hide There's emptiness inside
I wonder if they even bleed
They're savages! Savages! Barely even human
Savages! Savages! Killers at the core
They're different from us, which means they can't be trusted

(映画『ポカホンタス』より)

これを恐れていた。白人は悪魔だ
やつらには欲しかない
乳白色の肌の下にはなにもない
血が通っているかすら疑わしい
彼らは野蛮人！野蛮人！人間であるかも疑わしい
野蛮人！野蛮人！本性は殺人者だ
やつらは我々とは違う つまり奴らを信じることはできない

(著者訳)

先住民もまた、白人のことを「野蛮人」と歌っているのである。つまり、この歌は、異文化間の理解の難しさや自分と違うものの排除という過ちを歌っているのであり、そこでポカホンタスが現れ、間違いをただす物語なのである。この歌によってインディアンの子供たちが虐められるという批判があったようだが、それは物語を理解していれば起こらないことだろう。それでもいじめられたという事実があったのであれば、それは『ポカホンタス』とは別の場所で偏見を植え付けられ、歌詞の一部とその偏見が子供の中で結びついたため、歌の責任ではないと考えられる。比較的保守的な作品を作ってきたディズニーが、非はあったとはいえ、先住民という難しいテーマに挑戦したのは、大きな前進のように考えられるが、このような批判にさらされ、ディズニー映画は今後さらに保守的な傾向が強まったように見受けられる。

2. 2. 3 2000年以降『プリンセスと魔法のキス』を中心に

2008年オバマが黒人初の大統領に選ばれ差別はほとんどなくなったと世界の多くの人々が考えているだろう。現在、いまだ差別や格差は残存しているというのは一章二節四項の最後で述べたとおりである。では、ディズニー作品はどのような変化を遂げたのだろうか。初めて白人以外のプリンセスが『アラジン』で誕生してから15年余り、様々な人種を主人公とした映画が製作されてきたが『プリンセスと魔法のキス』(2009)でようやく初のアフリカ系黒人のプリンセスが誕生した。公民権法や投票権法の成立で法的な人種差別がなくなってから40年以上後のことである。

『プリンセスと魔法のキス』は、自分のレストランを持つという夢に向かって懸命に働いている主人公ティアナがカエルになった王子と共に、本当に必要なものは何なのかを模索していく物語である。初の黒人プリンセスとあって注目が集まった今作だけに、人種問題にかなり気を使ったことが伺える。この作品で注目すべきは多様な人種が共存していることである。舞台がニューオーリンズであるため、住人の半分以上は黒人であるが、主人公ティアナが働くレストランでは白人と黒人が仲良く食事している様子を見ることが出来る。また、ティアナの一番の友人が白人のシャーロットであり、対等な友人関係を築いている。そして、シャーロットは王子様と結婚することを夢見ており、黒人の王子ナヴィーンと結婚することを望んでいる。異なった人種の結婚が障壁として描かれていないのはディズニー史上初めてのこのように思われる。

このように第二次黄金期からさらに発展したように見える『プリンセスと魔法のキス』だが、興行的には成功したものの、ディズニー社が予想していたほどの興行収入をだすことはできなかった。また、グッズ展開などを見ると、『塔の上のラプンツェル』(2010)や『アナと雪の女王』(2013)に比べ知名度や人気を得られていないことは残念である。また、作中のなかで、ティアナが貧しい黒人女性、シャーロットがお金持ちの白人女性として描かれているのはいささかステレオタイプ的に見えることや、群衆の中にいたカップルの人種が同じであったことなどまだ、人種ごとの偏ったイメージというのはぬぐい切れていないように思われる。

2. 3 ディズニー映画に見る女性観

女性観を読み取るにあたり、中心に扱う作品は、第一次黄金期から『白雪姫』(1937)、第二次黄金期から『リトル・マーメイド』(1989)、現代の作品から『アナと雪の女王』(2013)の三作品とする。

2. 3. 1 第一次黄金期から(1937~1960年代)『白雪姫』を中心に

第一章第三節一項で触れたように、第二次世界大戦以前は男性が稼ぎ、女性は家を守るという役割を担うという考え方が一般的であった。しかし、それと同時にヴィクトリア的価値観から脱却しようとする女性が登場してきたのもこの時期である。この中でディズニーのプリンセスものはいくつかの定型から成り立っていた。

『白雪姫』では、主人公白雪姫の特徴として美しいことが挙げられ、それは繰り返し強調される。魔法の鏡が「バラのような赤い唇、雪のような白い肌」を持つ白雪姫をこの世で一番美しいと女王に告げるシーンから始まり、小人と白雪姫が初めて顔を合わせた時に

「かわいい」「美しい」「天使のようだ」と思わず惚けてしまうシーンや、白雪姫が毒リンゴを食べ深い眠りについたときの「ひときわ美しい白雪姫を小人たちは埋めることができませんでした」というナレーションなど挙げればきりが無いほどである。また、白雪姫は働き者で家事を進んでこなす女性として描かれている。登場シーンではお城の床を磨き、こびとの家にたどり着いたときはすぐに掃除と料理を行い、小人が仕事に出ていくとチェリーパイを作る。これらはまさに、男は外、女は内といった当時の価値観を反映している。そしてこの二つの特徴は『シンデレラ』(1950)にもほぼそのまま受け継がれていく。この時代の女性の理想は「美しく」「働き者」な女性ということだろう。

また、『白雪姫』の恋愛観・結婚観についても触れておきたい。白雪姫に限らずシンデレラにも言えることだが、白雪姫は受動的な女性として描かれており、王子様がいつか迎えにくる、という歌を歌いながら日々を過ごしている。そして、白雪姫自身がなにか行動をおこさなくても王子様は迎えに来てくれるのである。第一次黄金期のプリンセスものは『白雪姫』『シンデレラ』『眠れる森の美女』(1959)の三作品だが、どれも王子様が迎えに来て、結婚、そして「いつまでも幸せにられました」というラストである。この時代の女性の幸せは結婚であると考えられていたことが読み取れる。

ただ、『白雪姫』の中で小人の一人のおこりんぼは、「女はめんどろのもと」「図々しい女め」「甘い顔なんかすると女はすぐつけあがるぞ」と女性を下に見るような発言や偏見に満ちた発言を繰り返すが、彼のことは偏屈で頭が固い人物として描かれており、この時代も女性を下に見る発言は批判されるべきものとして描かれていたといえる。第一次黄金期の作品からは、あからさまな女性差別的表現は見られなかったが、当時の女性観といったものを伺うことができる。

2. 3. 2 第二次黄金期(1989~90年代)『リトル・マーメイド』を中心に

第一次黄金期の内向的で働き者、そして美しいという女性像、王子様との結婚が幸せであるという価値観の変化がディズニー映画で本格的に見られるのは、『リトル・マーメイド』からである。1990年前後という、第一章三節三項で触れたように既に第二派フェミニズムは終了し、女性の社会進出が進んだ時期である。女性は家にいるものという価値観はすでに古いものとして扱われ、60%以上の既婚女性が仕事に従事しており自立した女性像が確立されていたと考えられる。20世紀末になってやっとディズニー作品に反映された形である。

『リトル・マーメイド』では主人公のアリエルは従来のプリンセスと違い行動的である。人間に憧れる人魚アリエルは父親の言いつけを守らず、頻繁に海の上に行ったり、人間の道具を集めたりしている。これだけで、第一次黄金期の従順なプリンセスとは異なることが分かる。更に、アリエルは人間の王子エリックに恋をすると、半ば自分の意思で海の魔女アースラのもとに行き、人間にしてもらおうという行動にでる。恋は願っているだけでなく自分の力で行動しないと叶わないというわけである。このような行動的な主人公は第二次黄金期のプリンセスの共通の特徴であり、従来の女性観から脱却しようという姿勢を感じることができる。

また、第二次黄金期のプリンセスの特徴として外の世界への憧れがある。『リトル・マーメイド』では、海の世界で暮らすアリエルは陸の世界に憧れ、『美女と野獣』の主人公ベル

は「こんな町の生活よりもどこか違うところに行きたい」と歌い、『アラジン』のヒロインジャスミンは空飛ぶ絨毯に乗り、見たことのない世界に胸を躍らせる。これは女性が家という狭い世界から出て、広い世界へ出ていく、という流れにどこか似ているように感じる。

『リトル・マーメイド』からは結婚観の変化も読み取ることができる。エリック王子の家来であるグリムズビーがアリエルをエリックの結婚相手に勧めるシーンがある。このとき、アリエルの素性は分かっていたことから、王子と身分の違う者の結婚は認められていたことが分かる。また、これは『眠れる森の美女』から見られる現象であるが、登場人物が自由な恋愛を求めていることも特徴の一つである。それに対し変化していない部分も見られる。世界は違えど結局王子と王女が結ばれるという点や、結婚＝幸せという価値観はこの作品でも覆せていない。これらが批判の対象となったのは、本章一節で述べたとおりである。アリエルが人間に戻らず家族を捨てているという批判は、ラストシーンで、人間になるといっても海の仲間と交流がなくなるわけではないのを感じ取ることができるため、いささか過敏なようにも感じられる。ただ、このような批判をうけてかディズニー・カートゥーン・スタジオで制作された次回作『リトル・マーメイドⅡ Return to the Sea』(2000)では、アリエルの娘が人魚に憧れる様子を描くが、ラストシーンは人魚にはならず、海と陸の間の壁を消すことで海と陸の区別なく暮らしていく、というものになっている。

『リトル・マーメイド』後の作品では、『美女と野獣』で女性に対し偏見をもった男らしいガストンを悪役に据え、恋愛に関しても一目ぼれを回避し徐々に愛をはぐくむという新たな形を提示した。また、『アラジン』では王女と元泥棒が結ばれるという身分違いの恋にも挑戦した。第二次黄金期の中でも女性像や恋愛観は変わったが、主人公が行動的であることや広い世界を求め好奇心旺盛であること、物語の中心は依然恋愛と結婚ことが共通しているといえる。この時代は、様々な批判にさらされたことで、ディズニー映画では第二次世界大戦以前の女性観からは脱却した自立的な女性のみが主人公として受け入れられることとなったことがある。これは、女性像の画一化を促し、表現の幅が狭まっているともいえるかもしれない。

2. 3. 3 2000年以降『アナと雪の女王』を中心に

『アナと雪の女王』(2013)では更に発展した女性像を見ることができる。主人公アナは第二次黄金期の特徴を受け継いだ好奇心旺盛で行動的な性格をしており、運命の出会いに憧れている。しかし、もう一人の主人公である姉のエルサは、利口だが内向的な性格をしている。ディズニー作品は時代によって主人公の性格がどれも似通っている傾向があったが、主人公を二人にすることによりその脱却に成功している。

また、『アナと雪の女王』は、プリンセスものでありながら家族愛がメインテーマという異色の作品である。ディズニー映画で恋愛以外の要素を強める流れは、『リロアンドスティッチ』(2002)や『プリンセスと魔法のキス』(2009)などで強まっていたが、プリンセスものでここまで大きく扱われたのは『アナと雪の女王』が初めてだろう。真実の愛の力で魔法を解くのは、第一次黄金期のような完璧なハンス王子でもなく、第二次黄金期のような庶民出身のクリストフでもなく、姉エルサの妹アナを思う心であった。このシーンを、荻上は「姉妹がつらい過去を乗り越えること、それぞれの特性を受け入れることこそ、「真実の愛」なのだ」とバージョンアップしてみせた(荻上 2014:36)と評価している。

また、女性に比べ、男性の力が弱くなってきているのも現在のディズニー映画の特徴といえるかもしれない。『アナと雪の女王』のアナの恋愛相手であるクリストフは、どこか情けなく、アナに助けられてばかりである。クリストフがオオカミにつかまりかけるのをアナが助け、エルサが作り出した怪物マッシュマロウに追いかけられたときには、クリストフが慌てているうちにアナが思い切った行動を起こす。このように相手役の欠点を見せ、それを受け入れたうえで恋に落ちる様が描かれているのである。

様々な新しい展開を取り入れた『アナと雪の女王』であるが、世界興行収入は長編アニメ史上 1 位を記録したのに対して、全米の興行収入に限ると 4 位にとどまっている。『アナと雪の女王』をここまで押し上げた要因として、日本での大ヒットがある。本章の最後に、なぜ『アナと雪の女王』がこれほどまでに日本で支持されたのか自分なりに考えてみたい。もちろん、ミュージカルの素晴らしさや宣伝方法がハマったこと、ストーリー構成、声優のすばらしさなど様々な要因が考えられるだろう。しかし、劇中歌「Let it go」の「ありのまま」というフレーズが日本の女性たちの思いと一致したことが「アナ雪ブーム」の一因として存在するのではないかと考える。日本では「ありのままの自分になるの」と訳され「let it go」をポジティブにとらえる見方が大半である。しかし、英語版の歌詞は以下の通りである。

Let it go Let it go

Turn away and the slam the door

(映画『アナと雪の女王』より)

かまわないで それでいいのよ

背を向けてドアを閉めてしまうのよ

(著者訳)

字幕版では()内のように訳されており、かなりネガティブな歌詞であることが分かる。魔法の力を持ったエルサが、孤独になることで初めて自由になれる、という半ば自暴自棄なシーンであるため、このような歌詞になるのは当然である。自由の喜びをかみしめながらもどこかネガティブなシーンでなければ、この後アナがエルサを連れ戻しに行く理由が「祖国がエルサの魔法で永遠の冬になってしまった」ということのみで、家族愛の物語にはなりえない。しかし、日本語吹替版では「ありのままの自分になるの」と訳された。また、日本語吹替版では「Let the storm rage on . The cold never bother me anyway.(嵐をもっと暴れまわらせてやる 寒さは一度も私を悩ませたことはなかったんだから)」という周りのことを気にしないという意味の部分も「何も怖くない風よ吹け 少しも寒くないわ」と意味が微妙にずれてしまっている。これらの改変が意図されたものかはわからないが、結果「Let it go」はポジティブな自己解放を促す歌ととらえられ、「ありのまま」は 2014 年の流行語大賞トップテンにも選ばれた。「ありのまま」と『アナと雪の女王』の流行は、他の先進国に比べ女性の社会進出が進んでいない日本での女性の抑圧された状況と上手く一致した結果であるかのように思われる。

3. 映画の影響と向き合い方

3. 1 1章・2章を通して

1章では、時代ごとの人種差別と女性差別の歴史を明らかにし、2章では、人種差別と女性差別という観点から、ディズニー映画を考察した。

この過程で、ディズニー作品という今でも多くの児童が視聴する作品にも、時代ごとに共通する特徴があるほか、当時の差別観が作品に表れていることが分かってきた。特に、初期の作品では、ヴィクトリア王朝的価値観やジム・クロウの時代に即した差別的な表現やステレオタイプの表現がみられることが分かった。女性差別に関しては、あからさまな差別的な表現はほとんど見られなかったが、初期作品には女性は家で妻や母としての役割を果たすという価値観が反映されたものが多かった。また、1990年代前後になると、偏った表現は批判にさらされることになり、女性や少数民族に配慮した作品が数多く生まれることとなった。69年に終了した公民権運動からは約20年、第二派フェミニズム終了から約10年の年月が経った後のことである。様々な批判にさらされる中でこの時期からは、偏見や差別の実像というよりは、人々の理想像や求められている題材が作品によく表れるようになった。その結果、特に女性像に関しては、活発で好奇心が強く自立している女性が作品に溢れた。それは、多様な生き方を認めるという時世に逆行して、女性に関する表現の方法を狭めているようにも思われる。2000年代後半以降の作品は、異なる者同士の共存や家族愛などテーマがある程度似通っている。そして、ディズニー映画は新たな問題や価値観の提示といった先鋭的な作品はほとんどなく、新たな価値観が受け入れられるようになった後にその価値観を取り入れた作品を作るという、保守的な体制をとっていると考えられ、作品の幅や描写の方法はかなり狭いものようである。

このような偏った描写は、子供たちに誤った価値観や偏見を植え付けてしまう可能性を内包している。私たちの価値観というのは幼少期起きた実際の出来事のほかに、映画や小説などのメディアを通して構築されていくと考えられるためである。それでは子供たちに偏った価値観を植え付けるのを防ぐにはどうしたらよいのだろうか。

3. 2 言葉狩りと表現の規制

1970年代から80年代にかけて頻繁にとられたのが規制という方法である。その中で有名なものに「ピノキオ問題」と「ちびくろサンボ絶版」がある。前者は、童話「ピノキオ」の「びっこのキツネ」と「めくらのネコ」というのは差別的表現であるという抗議が起こり、1976年に実際に一部が回収となった問題である。このような言葉狩りは、「その差別語とされる語句を自分で検討せず、理解せずにただ規制することになる」(灘本 1999)と今では否定する意見も多い。

後者の「ちびくろサンボ」についてはもう少し詳しく考察していきたい。1950年代日本で大ヒットした絵本「ちびくろサンボ」は、1988年に日本で絶版されることとなった。黒人差別をなくす会の抗議が原因である。彼らは「ちびくろサンボ」を三点から非難した。①登場人物の名前が「サンボ」「マンボ」と差別的であること②まっくろな顔、真っ赤な唇、

バンダナといった黒人にとってマイナスイメージを抱かせるようなイラストであること③黒人が愚かで未開なものとして描かれていること(灘本 1999)である。抗議をうけた岩波書店は①の名前についてのみ差別的な表現があったと言及し、わずか4日後に絶版をきめた。しかし、「ちびくろサンボ」というのはインドの昔話をもとにして作られたもので、その名前は全く悪意のあるものではなかった。岩波書店は、そのような事実確認を行うことなく、また、②や③のステレオタイプの表現に関する批判には触れることなく「サンボ」という言葉のみで絶版を決めたようである。また、「ちびくろサンボ」は1940年代にいち早くアメリカで問題になっているが、こちらの批判は②や③のようなステレオタイプの表現に関するものがほとんどであり、「サンボ」という言葉を根拠とした抗議はほとんど行われていなかったようだ。このような経緯で結果的にすべての出版社が「ちびくろサンボ」の販売を取りやめ、「ちびくろサンボ」は日本から姿を消すこととなった。現在では「チビクロさんぼ」と名前を変え「ちびくろサンボ」は復活している。ただし、「チビクロさんぼ」は主人公を黒人でなく犬に変更し、登場人物の名前を変更するなど大幅な改変がなされている。また、アメリカの復刻版の日本語訳「トラとバターのパンケーキ」も今では読むことができるがこちらも主人公の名前はサムに変更されている。

このような差別的表現の規制は、表現の自由を侵すことになるだけでなく、規制することにより差別という問題をなかったことにしてしまう危険性を有している。「この言葉は差別語だから使ってはいけない」というのは簡単なことであるが、灘本の述べているようにただの機械的な作業になってしまい、なぜこの言葉は差別語であるのかを検討しなくても、差別に対して十分に配慮した気持ちにさせてしまう可能性がある。規制すれば差別がなくなる訳ではなく、表面上見えなくなっただけにすぎない。言葉だけを問題として、絶版としたことは、差別の根本的な解決になるとはとても言い難い。

また、何を基準に差別語と断定するのかという問題もある。差別語かどうかというのは、立場などによって変わる可能性がある。例えば、「エスキモー」という言葉は、生肉を食べるものという差別用語であるからイヌイットと呼ぶべきだという批判がある一方で、イヌイットと呼ばれることを差別的と感じる民族も存在する。エスキモーは数十の集団で言語も複数に分かれており、イヌイット語を話さない民族も存在するためである。(灘本 1999)

以上のことから、言葉狩りなどの規制という手段は差別問題を見なかったことにしているにすぎず、差別と向き合うことを避けているとすら考えられ、適切な方法とは言えないだろう。「サンボ」とからかわれ、辛い経験をしたのは絵本のせいではなく、日常生活に潜む誤った価値観や偏見によるものだと考えられるからである。

3. 3 差別的表現との向き合い方

近年、オバマがアメリカ大統領に選出されたこともあり、差別は解決済の問題であるとの認識が強まってきているように感じられる。しかし、偏見や差別というのは未だに根強く残っている。特に偏見というものは、人々の無意識下に潜んでいるためである。例えば、人種的偏見について、アメリカで10数万人がうけたIAT(潜在的態度測定法)という調査によると、約90%の白人が黒人アメリカ人の顔を否定的な単語に結び付けたことがわかった。特筆すべきはこのような傾向が見られたのは白人だけではなくアジア系アメリカ人も反黒

人的な偏見を示したことである。(ワイズ 2010)黒人は暴力的であるというステレオタイプは、人種を問わずなくなっていないと言える。

では、歴史的背景から黒人に対してマイナスイメージを持つ白人だけでなく、アジア系など他の人種もそのようなマイナスイメージを黒人に対し抱いてしまうのはなぜなのだろうか。様々な要因が考えられるが、映画やTVなどのメディアの影響も少なからずあるように思われる。「私たちはテレビ、新聞、雑誌インターネットなどのメディアを通して世の中の出来事とであらう。」(好井 2009:63)これは、映画や小説などの文化的事象に対しても同じことが言えるだろう。好井は、映画『容疑者 X の献身』の中で、女性刑事がお茶くみを頼まれるシーンについて「会社などで女性にだけお茶くみを強いるのは問題で、平等な職場に変えていこうという力が普段から働いている一方、こうした娯楽映画では伝統的な性別役割が要求され抵抗しつつも女性が演じるというシーンが確実に息づいているのである。」と述べている。このような描写に繰り返し触れることによって偏った価値観が生成されていくと考えられ、表面的な教育だけでは偏った価値観の流入を防ぐのは困難であることを示唆している。NAEYC(全米乳幼児教育協会)の調査によると、2歳から5歳の間に子供は自分の人種や性別、障害について気づき始めるという。このような「カテゴリー化」が始まるということは、家族や小説、映画からステレオタイプの価値観を植え付けられる可能性があるということである。私たちの価値観の生成は、幼少期に見聞きしたものに大きく依存すると考えられる。そのため、子どもがどのように差別に接していくかというのは重要な問題である。そのため、私たちや、小さな子供を持つ親が映画などのメディアに含まれる差別的表現に、より真摯に向き合っていくことが必要になってくる。

まず、子供の親は、ディズニー作品=いい作品と決めつけるのではなく、偏見や差別的表現はどんなメディアにも含まれている可能性を認識することが必要だと考える。ステレオタイプの認識や偏った価値観、そして差別が生まれる原因は非常に身近なところに存在していると私たちは気づかねばならない。ディズニー作品は二章一節で述べたように、世界中から高い評価を受け、全世界で今でも子どもたちに見られている作品である。確かに、その作品に込められたメッセージは素晴らしいものであり、子どもに見せる価値のあるものであるといえるだろう。しかし、ディズニーの長編アニメーションの第一作『白雪姫』は1937年公開と、実に80年近く前に作られた作品である。このような幅広い年代の作品が存在するディズニー作品において、差別や偏見の顕著だった時代の価値観が反映された作品が存在するのは二章で確認したとおりだ。中には、今の子供たちがそのまま受け取ってしまうと問題のある作品も存在する。そのため、私たちは世間的評価が高い作品=何の問題もない作品とは言えないことを、今以上に認識する必要がある。有名な作品で皆が見ているから、子どもにも見せよう、と安直に考えるのではなく、一度様々な観点から作品を見直すことが必要だろう。ただ、本章一節で述べたように、すぐに規制して、少しでも問題のある表現があれば見せない、というような選別を行うことは必ずしも正しいとは言えない。

私は、子どもに偏った価値観を植え付けることを防ぐには、幅広い作品を見せることが大切だと考える。ディズニー作品を見ると、時代によって女性像が画一化してしまっているのは二章三節で触れたとおりであるが、年代ごとに様々な女性像が描かれているともいえる。そのため、ディズニー作品であれば、初期の内向的な女性が描かれた作品、90年代

の自立的であるが結婚＝幸せという女性観が踏襲された作品、2000年代以降の自立した女性であり、恋愛より、夢や家族愛をもとめる女性が描かれた作品などをまんべんなく見せることによって、女性観の偏りを防ぐことができるだろう。また、あからさまな差別的表現が含まれた作品や、誤った情報が含まれた作品に対しては、親が子供にアフターフォローをしっかりとおこなうことも必要になってくる。作品に対する感想を子どもに聞き、それについて話し合うことや、正しい知識を得ることができる絵本などを見せることなどが方法として考えられる。正確な知識を得ることは差別と向き合う上で非常に重要である。「無知(知らないこと、知ろうとしないこと)は差別が育つ温床」(好井 2009: 16)であるためだ。

そして、制作側には、批判を恐れ守りにはいるのではなく、様々な価値観を描いた作品を発表していくことが求められる。ディズニーは今まで保守的な作品作りを行ってきたといえるが、結果、表現やテーマの幅を狭めている可能性がある。そのため、制作側は企業イメージを損ねることや批判を恐れず、先鋭的な作品や多様な価値観をもった作品を生み出すことが、偏った描写をなくすことや差別に関する問題を改めて視聴者に提起する上で必要なように思われる。

これまで差別と向き合うための考えをいくつか述べてきたが、それには課題も残されている。まず、どれも親などひとりひとりが注意するという個別の対策にとどまっており、実効性に乏しいということ、また、差別を身近なものとしてとらえると月並みな結論になってしまったことである。このような個人の単位での対策は問題の根本的な解決になるとは言い難い。そのため、表現の自由といった難しい問題もあるものの、結局は、企業や国といったより大きな単位での対策が必要になっていくであろう。

おわりに

本論文では、アメリカの人種差別と女性差別の歴史を明らかにし、それがディズニー映画にどのような形でどの程度表れているのかを考察した上で、ディズニー映画に含まれる差別的な表現と子どもを持つ親がどのように向き合っていくべきかを考えてきた。その結果、ディズニー映画という児童が見る作品にも差別的な描写が含まれていることや、ディズニー映画は当時の世相や批判をうけた保守的な作品作りをおこなっていることが分かった。また、そのようなディズニー映画の差別的表現と向き合っていくにあたり大切なのは、「言葉狩り」などの規制をおこなうことではなく、ディズニー映画など世間的に評価を受けている映画が必ずしも何の問題もない素晴らしい映画だとは限らないということを親が認識し、幅広い様々な価値観を持った映画を子どもに見せること、との結論に至った。そのためには、差別を一人ひとりがより身近なものとして認識することが必要であり、正確な知識を得ることもまた同様に大切だといえる。ただ、残された課題として、ディズニー映画には差別的な表現が含まれていることを認識し子供に見せるときは十分注意する、といった月並みな結論に終わってしまったことや実効性に乏しい解決策しか提示できなかったことがある。今後、私自身、差別は身近な場所に潜んでいることや、映画などの文化的

事象には問題のある描写が含まれていることに今以上に注意を向けるとともに、差別的表現と向き合う方法について、より多くの人に考えてもらう方法を思案していきたいと考えている。

参考・引用文献

- 青柳清孝,2006,『ネイティブ・アメリカンの世界—歴史を糧に未来を拓くアメリカンインディアン』古今書店
- 板橋晶子,2010,「第二次世界大戦期の消費と女性—広告に描かれた女性像」.有賀夏紀・小檜山ルイ編『アメリカジェンダー史研究入門』青木書店
- 有賀夏紀,1988,『アメリカ・フェミニズムの社会史』勁草書房
- 有賀夏紀,2010,「アメリカ・フェミニズムの現在—第三派フェミニズムなのか」.有賀夏紀・小檜山ルイ編『アメリカジェンダー史研究入門』青木書店
- 有馬哲夫,2001,『ディズニー千年王国の始まり—メディア制覇の野望』NTT出版
- 有馬哲夫,2004,『ディズニーとライバルたち—アメリカのカートゥーン・メディア史』フィルムアート社
- 大辻千恵子,2010,「大恐慌と働く権利」.有賀夏紀・小檜山ルイ編『アメリカジェンダー史研究入門』青木書店
- 荻上チキ,2014,『ディズニープリンセスと幸せの法則』星海社
- 金澤智,2014,『アメリカ映画とカラーライン—映像が侵犯する人種境界線』水声社
- 叶精二,2014,『アナと雪の女王の光と影』七つ森書館
- 栗原涼子,2010,「女性参政権運動」.有賀夏紀・小檜山ルイ編『アメリカジェンダー史研究入門』青木書店
- 小寺初世子,2000,『女性差別をなくすために—女性の目で判決・グリム童話・女性漢字を読む』明石書店
- 佐藤千登勢,2010,「第二次世界大戦期の軍需産業と女性労働者—カリフォルニア州リッチモンドのカイザー造船所を事例として」.有賀夏紀・小檜山ルイ編『アメリカジェンダー史研究入門』青木書店
- サラ・M・エヴァンズ,1997,『アメリカの女性の歴史 第2版 自由のために生まれて』明石書店
- 猿谷要,2009,『アメリカ黒人解放史』二玄社
- ジェームズ・M・バーダマン,2011『アメリカ黒人の歴史』NHK出版
- 週刊文春編集部編,1994,『徹底追及「言葉狩り」と差別』文藝春秋
- 土屋由香,2010,「冷戦期の日米関係とジェンダー」.有賀夏紀・小檜山ルイ編『アメリカジェンダー史研究入門』青木書店
- ティム・ワイズ,2011『アメリカ人種問題のジレンマ—オバマのカラーブラインド戦略のゆ

くへ』明石書店
 ティム・ワイズ,2010,『オバマを拒絶するアメリカ：レイシズム 2.0 にひそむ白人の差別意識』明石書店
 灘本昌久,1999,『ちびくろサンボよ すこやかによみがえれ』径書房
 ニール・ゲイブラー,2007『創造の狂気 ウォルト・ディズニー』ダイヤモンド社
 三島亜紀子,2010,「児童文学にみる障害者観―「ピノキオ問題」は克服したか?」.倉本智明編著『手招くフリーク 文化と表現の社会学』生活書院
 蓮見博昭,2015,『アメリカに女性大統領は誕生するか』日本評論社
 好井裕明,2007,『差別原論：〈わたし〉のなかの権力とつきあう』平凡社新書
 好井裕明,2009,「排除と差別の社会学を考える基本をめぐって」「メディアから排除や差別を読む」、好井裕明編『排除と差別の社会学』有斐閣選書
 Cornel Pewewardy, “The Pocahontas Paradox: A Cautionary Tale for Educators”
 Libby Brunette、Claudette Mallory & Shannon Wood,2011, “Stereotypes & Racism in Children's Movies”NAEYC

『白雪姫』1937(1950),デイヴィット・ハンド監督
 『ダンボ』1941(1954),ベン・シャープスティーン監督
 『シンデレラ』1950(1952),ウィルフレッド・ジャクソンら監督
 『ピーターパン』1953(1955),ウィルフレッド・ジャクソンら監督
 『ジャングル・ブック』1967(1968),ウォルフガング・ライザーマン監督
 『リトル・マーメイド』1989(1991),ジョン・マスカー監督
 『美女と野獣』1991(1992),ゲーリー・トゥルースデイルら監督
 『アラジン』1992(1993),ジョン・マスカーら監督
 『ポカホンタス』1995(1995),マイク・ガブリエルら監督
 『リトル・マーメイドII Return to The Sea』2000,ジム・カマラッド監督,OVA
 『プリンセスと魔法のキス』2009(2010),ジョン・マスカーら監督
 『アナと雪の女王』2013(2014),クリス・バックら監督

()内は日本での公開年